



ブレットさんの

いんたーなしょなる

国際コーナー

Volume:12



エミュー大戦争(鳥に負けた国)

1932年に西オーストラリア州のキャンピオン地区で「エミュー」の膨大な頭数を減らすために、機関銃を武装した兵士が派遣されました。故に、近年に話題になっているこの出来事は「エミュー大戦争」と呼ばれるようになりました。エミューというのはオーストラリア固有、大型の飛べない鳥のことです。



第一次世界大戦が終わったら、元軍人達は農地を与えられました。エミューは渡り鳥で移動の途中、新しく家畜を飼育するよう開拓された土地が、快適な住環境であることを気付いて農地を侵略し始めました。農作物を食って壊したり、フェンスにウサギも入れるような穴を開けたりしたエミューは大被害を引き起こしました。

最初数2万羽のエミューに対して、農家たちは元軍人として機関銃の強さを知っていて、政府に兵士の動員を依頼しました。政府は受け入れて、機関銃と弾薬1万玉で武装した兵士を派遣しました。

1932年11月2日、戦争の初日に兵士は50羽を見かけて、脅かしたエミューの動きに予想もつかず、数羽しか殺せませんでした。撃たれてもエミューの動き



は鈍くならないことも兵士を驚かせました。次の件、11月4日に1千羽が目撃され、今回は待ち伏せにしましたが、12羽殺したら、銃の薬莖が詰まって撃てなくなって、残りのエミューに逃げられました。その数日後、他のエミューが農地を壊している間に、人の動きを見張るエミューもいるという報告がありました。エミューを追いかけて撃つように、トラックの

上に機関銃を装備しました。でも装備して重くなったトラックより、エミューの方が速かっただけでなく、荒れた地形でちゃんと狙うこともできず、これはまた失敗しました。



戦争は1ヶ月間長引いて、結局1932年12月10日に兵士は戦争を諦めて帰りました。

結果としては986羽の死亡を確認しましたが、1羽に10発の比率で9860玉弾薬を使って、大恐慌時期にある政府にとって、この戦争は大損失に終わりました。そのため、今になってこの戦争は「人類の敗北」と判断されています。

鳥類学者ドミニク・サーベンティはエミュー戦争についてこう要約しました。「エミューの群に一斉射撃して始末するという機関銃手の夢はすぐに消え去りました。エミュー軍が採用していたゲリラ戦術に対するオーストラリア軍装はとても非経済的でした。よって、くじけた部隊は1ヶ月後戦場から撤退しました。」

戦争が終わったあと、政府にもう頼れなかったから、農家は代わりに懸賞金システムを採用していました。これはとても効果的で、6ヶ月間で50,000件以上の懸賞金が請求されました。

現在オーストラリアのエミューは法律で保護されています。

※ブレットさんの原文をほぼそのまま掲載しています。

